

SHOW HEYシネマルーム

★★★

アルマーニ

配給/コムストック

2003 (平成15) 年5月20日鑑賞

<東映試写室>

Data

監督・製作: ジュリアン・オーザン
ヌ

製作: ローワン・サマーヴィル

出演: ジョルジオ・アルマーニ

👁️👁️ みどころ

シャネルなどと並ぶ世界的ファッションデザイナーのジョルジオ・アルマーニの人物像を描いた異色のドキュメント映画。40歳から会社をおこし、わずか25年間で「アルマーニ帝国」を築き上げた男の人物像は果たして実像か・・・?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<アルマーニの記録映画>

この映画は、シャネル、サンローラン、クリスチャン・ディオールと並ぶ世界的ファッションデザイナーのジョルジオ・アルマーニの1999年から2000年にかけての1年間の行動を追ったドキュメント作品。

もちろん、アルマーニという名前は世界的に有名で、当然私も知っており、「アルマーニ帝国」を率いる総帥だということぐらいは知っているが、その実像などは全く知る由もない。

<40歳から65歳までの25年>

ジョルジオ・アルマーニが自分の会社を設立したのは、意外にも彼が40歳の時(1960年)と遅く、まだ25年しか経っていない。しかしこの25年間で世界33カ国に249店舗、3千人の従業員を抱え、毎週3億6千万円を稼ぎ出す「アルマーニ帝国」を築きあげたわけだ。しかもその株主はアルマーニ唯一人とのこと。したがって、この映画はいわば、アルマーニの「25周年記念」でつくられたようなものだ。

＜アルマーニの人物像は・・・＞

主役は当然アルマーニ自身。1時間19分の上映時間中、出ずっぱりだ。そして、映画は決して、自分の自慢話や、立身出世を語っているわけではない。逆に、自分がいかに真面目にデザイナーという仕事と向き合ってきたかを率直に語り、カメラもその軌跡を追っている。

しかし、私は1人の人物をわずか1時間余りカメラで追っただけで、その実像が伝えられるとは考えないし、そう単純に、この映画が見せるアルマーニ像を信用することはできない。この映画は所詮アルマーニと密接な人間関係を持つジュリアン・オーザンヌ監督や製作者であるローワン・サマーヴィルの目を通して見たアルマーニの人物像を描いたものだ。

したがって、そこで語られる言葉は、自慢話でなくても、結果的には「アルマーニ讃歌」のフレーズになっていると言わざるを得ない。

いわく、「私はニセモノが嫌いだ。見せかけの真実はみたくない。」、いわく、「私のゴールは、自分のデザインが時代にフィットして、その服がみんなに認められることだ。富は成功した結果にすぎない」。これらの言葉を率直に額面どおり信用できるのだろうか・・・？

もっともこれは私の「ひがみ」かもしれないが・・・。

＜私のスーツ＞

私は基本的にオシャレにはあまり関心がない。人並みの男と比べても多分関心は低い方だろう。あまりブランドモノにも興味がない。しかし、私がここ15年ほど着ているスーツは、そのほとんどがLANVIN（ランバン）のものだ。

バブルの頃は、デパートのランバンの店で正規に買えば、1着15万円ぐらいしていたし、絶対まけてくれない高級ブランドだ。しかし、私が買っていたのは、「お得意様御招待」という名目で、年に数回やるバーゲンセール。ブランド品は表向きにはバーゲンはやらないが、ランバン専門の会社があり、そこで事実上毎年やっていたわけだ。繊維関係の友人がたくさんいる私はそんな恩恵(?)を受けて、毎年数回このバーゲンに行き、買うときは大体〇〇%位で「まとめ買い」をしていた。

そして、慣れてくると、その中でもさらに「余りモノ」や特別バーゲン品がある。さらに1シーズンずれたモノは当然安くなっている。紳士モノのスーツの流行なんて知れたもの、と思っている私は、一度に何着もまとめ買いをしていたが、根がケチな私は、結局一度も袖を通さないまま、しまいこんでいるスーツも多い。今度着よう、今度着ようと思うのだが、どうも面倒くさくて・・・。

＜アルマーニのスーツの思い出＞

そんな私でも、昔一度知り合いの女性とアルマーニの服を見に行ったことがある。「これ

素敵、「この色いいネ」といいながら……。しかし「直輸入」モノのアルマーニの上着を着て、パンツをはいてみると、自分の体型のみじめさを思い知らされてしまった。袖はブカブカ、足の裾はダブダブとなるため、いくらカッコいいアルマーニのスーツを着てもサマにならない。つまり、自分の「ペンギン体型」にはどうしても合わないのだ。

そこで思い当たったのは、あのランパンのスーツもフランス人向けのランパンのスーツではなく、最初から日本人用の体型向けにつくっていたということだ。それ以来、アルマーニのスーツなど見たこともないし、袖を通したこともない。

＜興味を引いた2つの点＞

私が興味を持ったのは次の2つ。その1つは「アルマーニ帝国」を築きあげた今も、ショーの指示から店のレイアウトの指示まで、すべて最終判断はアルマーニ自身が下しているということ。これは彼が職人であることを端的に示すもの。つまり「こだわり」だ。これがいいことか、悪いことかは別として、弁護士稼業を「職人」稼業と考えている私も同感できる感覚だし、私も大切にしていきたいと思っている。きっとアルマーニの血液型もA型か……？

そして、第2はアルマーニには親友はいないとのこと。そして付き合っている友達も同年代は少なく、若い人たちが多いということだ。これはすごく意外な「事実」だが、若い人たちと付き合うことによって、その感覚や感性を自然に吸収している、というスクリーン中での家族たちの解説は説得力があった。そこでつつい自分を振り返って、若い人たちの歌が好きで、一生懸命覚えて唄っている俺だって、「アルマーニに負けないぞ」などと思ったりしたが……。

＜総評＞

最初から期待して観に行ったわけではなかったし、上映時間も1時間19分と短いものだったから、「まあこんなモノか……」と思いながら、全く知らない分野を勉強できたことでまあ満足……。

2003（平成15）年5月21日記